

爪水虫について

爪水虫(爪白癬)とは白癬菌というカビが爪に入りこんで、爪が白や黄色に濁ったり、分厚くなったり爪の中に白い筋ができたりする病気です。足の爪に発症することが多く、足の水虫を放置した結果起こってくる場合が大半です。爪水虫の人数は日本では10人に1人近く、約1200万人と推定されています。

爪水虫の症状と似た他の爪の病気もありますので、見た目だけでは診断ができません。診断するには、病変部の爪を少量削り取り、顕微鏡で白癬菌がいるのを確認する必要があります。

白癬菌はカビの一種で皮膚を覆っている角層や爪、髪の毛などに住みついて感染症を引き起こします。他のカビと同様に高温多湿な環境を好み、一般に気温20~40度、湿度60%以上の環境を好みます。

爪水虫自体は自覚症状はほとんどありませんが、放っておくと、爪が厚くなる、色が濁る、変形するといった症状が着実に進行します。やがて靴が履きづらくなったり、歩きにくくなったり、厚くなった爪に押されて指が痛くなります。また、治療されていない爪水虫の爪はいわば白癬菌の貯蔵庫のような役割を果たしており、常にまわりに菌をばらまいています。その結果、自分の足の水虫も完治しませんし、体の他の部位や、周りの家族、友人にもうつしてしまう可能性がありますので、きちんと治療することをおすすめします。

治療についてですが、普通の足水虫であれば、塗り薬を根気よく塗り続ければ、治っていきますが、爪水虫となると塗り薬だけでは爪の奥まで浸透せず、治すのは非常に困難で、飲み薬が効果的です。また、飲み薬の場合、体の内側から治すので足水虫にかかっていた場合にはこれも治すことができますので、一石二鳥の効果が期待できます。塗り薬のように、塗り残しの問題が生ずるといったことがないのも飲み薬のメリットです。

飲み薬ですが、現在は主に2種類の飲み薬が使われています。1種類の薬は1日1錠を毎日服用する薬で、爪が生え変わるまで半年~1年内服が必要です。もう1種類の薬は飲み方が少し変わっています。パルス療法と言って、1週間薬

をまとめて飲んで、3週間お休みするという飲み方で、それを3回繰り返します。その後は服用しなくても、しばらくの間爪の中に薬が貯留するので、次第にきれいな爪に生え替わっていきます。

どちらの飲み薬でも爪水虫は爪が生え変わるまで治りません。個人差はありますが、一般的には1ヵ月ごとに手の爪で約3ミリ、足の親指の爪で約1.5ミリ伸びると言われ、完全に生え変わるには、それぞれ6ヵ月、1年以上の期間が必要です。どちらの飲み薬も有効率は約80%くらいといわれており、爪がなかなか伸びないと治癒が困難な場合もあります。

また、どちらの薬も肝機能等をチェックするため、時々血液検査が必要となります。ある種の薬とは併用できない場合があるので、服用中の薬のチェックが必要です。

このように飲み薬が開発されたことで、爪水虫は治りにくい病気から、完全に治る病気へと様変わりしました。近年テレビのCMや新聞・雑誌などで爪水虫について目にすることが多く、気になっていらっしゃる方も多いかと思いますが、まずはきちんと診断することが大切ですので、一度皮膚科を受診されることをおすすめします。

皮膚科主任部長 早川彰紀

No.70 2011.10.1 発行 編集：教育・広報活動委員会